

顔面神経麻痺後病的共同運動評価における SI 値と SI 比の比較

◎宮林 知誉¹⁾、小林 昌弘¹⁾、松下 陽子¹⁾、北川 孝道¹⁾、嶋田 昌司¹⁾、松尾 収二¹⁾
公益財団法人 天理よろづ相談所病院¹⁾

【背景】顔面神経麻痺の後遺症である病的共同運動の客観的評価法として、本来の筋の反応に対する麻痺側の共同運動を評価する病的共同運動値(synkinesis index value: 以下 SI 値)と、病的共同運動の程度を左右の筋で比較する病的共同運動比(synkinesis index ratio: 以下 SI 比)がある。今回 SI 値と SI 比について、どちらが病的共同運動の評価に有用であるか検討した。

【対象】2015 年 1 月から 2018 年 3 月までに当院の耳鼻咽喉科を受診し、顔面神経麻痺と診断された患者 176 名(男性 106 名、女性 70 名)を対象とし、病的共同運動発症群 7 名(男性 4 名、女性 3 名)と非発症群 169 名(男性 102 名、女性 67 名)に分類した。また、顔面神経麻痺既往のない健常者 40 名(男性 24 名、女性 16 名)を対象とした。

【方法】SI 値は、左右の眼輪筋に電極を装着した状態で、患側口笛運動時の表面筋電図面積を健側閉眼時の面積で除し、SI 比は同状態で患側口笛運動時の面積を健側口笛運動

時の面積で除した値とした。SI 値と SI 比について、病的共同運動発症群、非発症群および健常群の 3 群における群間差検定を行った。また発症群において、健常群の基準範囲を超える割合(陽性率)を算出した。

【結果】SI 値においては陽性率が 14%と低値であり、発症群と非発症群との間に有意差を認めなかった。これに対して SI 比では陽性率が 57%と SI 値に比べ高値であり、発症群が非発症群より有意に高値となった。

【考察】病的共同運動で得られる筋活動は小さく、そのため本来の眼輪筋活動と比較する SI 値では病的共同運動発症群において値が正常化することが考えられた。一方 SI 比は、口笛運動時の麻痺側と健側の共同運動比を評価しているため、共同運動を捉えやすいと考えられた。

【結語】病的共同運動の評価には、SI 値より SI 比の方が有用である。 連絡先 0743635611 内線 7445